博士論文審査及び学力の確認の結果

学位請求者　　近藤　野里

学位請求論文　　17 世紀末および 18 世紀初頭フランス語におけるリエゾンの分析
－ Milleran (1694) および Vaudelin (1713, 1715) の文献調査を基に－

審査委員（主査）　黒　澤　直　俊

＜審査結果＞

審査委員会は、主査に黒澤直俊（ポルトガル語学）、副査として斎藤弘子（英語音声学）、益子幸江（一般音声学）、Sylvain Detey（フランス語学）、川口裕司（フランス語学）の5名から構成され、それぞれ専門の見地から論文を精査し、内容を詳細に検討した上で2015年7月4日の公開の最終試験を行った。その後、論文および最終試験の内容について協議を行った結果、本論文は、本学大学院が学位授与のために定めた基準を十分に満たしているだけでなく、優れた高い学術性を示していることが確認され、よって審査委員会は全員一致で、近藤野里氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であると判断した。

論文および審査の概要は以下の通りである。

＜論文概要＞

本論文の目的は、17 世紀末および 18 世紀初頭におけるフランス語のリエゾンについて明らかにすることである。先行研究において、この時代のフランス語におけるリエゾンはあまり注目されてこなかった。これは、音声現象であるリエゾンをそもそも実際に録音された音声からではなく、文献調査においてどのように研究できるのかという問題点があるからである。本研究では、17 世紀末および 18 世紀初頭に 2 人の異なる著者によって書かれた、語末子音字の発音有無を確認することが可能な文献をコーパスとして使用することと、さらに、語末子音字の発音およびリエゾンについての説明が書かれた 16 世紀以降の文法書を調査することで、コーパス調査から得られた結果を補強している。論文では 17 世紀末および 18 世紀初頭に 2 人の異なる著者 René Milleran と Gile Vaudelin によって書かれた文献をコーパスとして、語末子音字の発音およびリエゾンの実現について分析が行なわれている。これにより、この時代のフランス語におけるリエゾンが実際にはどのようなものであったかが明らかにされている。次に、2 つのコーパスを比較することで、リエゾンの実現に対するスタイルの違いの影響、そしてリエゾン子音[z]および[t]が形態的マーカーとしての機能を持ちはじめる過程が観察されている。基本的にこの研究は 17～18 世紀の共時態を対象としているが、通時的変化についても配慮がなされている。リエゾンに関する通

時的変化についてはこれまで体系的な研究がないため、本研究の意義の一つであると考えられる。

リエゾンに対する研究は、特に20世紀以降、規範的研究、記述的研究、社会言語学的研究、理論的研究といった、言語学の幅広い分野において様々な形で展開されている。リエゾンという現象に対する幅広い分野からの関心の理由は、2つの語の間で起こる子音が発音される現象であるリエゾンのメカニズムの複雑さであろう。少なくとも現代フランス語においては、言語内的要因および言語外的要因といった2つのタイプの要因がリエゾンの実現および非実現に影響すると考えられている。本研究で特に関心が払われたのは、17世紀および18世紀のフランス語において既にこのような要因が存在していたのかということである。

本論文の構成は以下の通りである。

序章では、研究の背景、目的、論文全体の構成が述べられている。

第二章では研究対象であるリエゾンおよびそれ以外のサンディ現象（アンシェヌマン、エリジオン、周辺的なリエゾン）について現代フランス語を例に取り、一般的な定義を与えている。フランス語はサンディ現象を豊富に内在させる言語であることから、フランス語において「語」の定義を与えることは重要であり、語の定義には綴り字との関係性が欠かせないと言われている。従って、語を定義するための綴り字の重要性についての考察が行なわれている。次に、リエゾンが実現される場合に発音されるリエゾン子音の特徴について提示し、他の子音とはどのような点で区別されるかを説明している。また、周辺的なリエゾンとして興味深い現象である、アンシェヌマンのないリエゾン、間違ったリエゾンについての説明が与えられている。最後に、リエゾン実現のコンテクスト（義務的、選択的、禁止的）が分類されている。

第三章では、20世紀と21世紀の先行研究で論じられたリエゾンの特徴およびリエゾンの実現に関する要因について要約している。先行研究は大きく4つのタイプに分類することができる。この4つのタイプとは規範的記述研究、コーパスに基づいた記述的研究、社会言語学的研究、理論的研究である。まず規範的記述研究においては「リエゾンはどのように実現されるべきか」という姿勢に特徴が見られる。リエゾンの実現および非実現に関する基準をフランス語話者およびフランス語学習者に与えることがこれらの研究の成果であると同時に目的となっている。次に、コーパスに基づいた記述的研究は実際に話されるフランス語を観察することで、「リエゾンはどのような場合に実現し、その実現にどのような要因が影響するのか」という問いに対する答えを提示している。社会言語学的研究は「リ

エゾンの実現および非実現はどのような社会言語学的特徴を反映するのか」という問いに答えることに寄与したといえる。さらに、理論的研究では、音韻論および形態論の枠組みの中で、リエゾン子音の位置について多くの議論がなされた。統語論では、統語構造の分析によって、義務的リエゾンおよび選択的リエゾンの区別が試みられた。リエゾンの研究が言語学の複数の分野で行われる理由は、リエゾンという現象が通時的に形成される過程の中で、少しずつ複雑性を増していったという経緯に関わることが関係しているとされる。

第四章では、フランス語においてリエゾンという音韻現象が形成された 3 段階の過程を文法家の証言を検討することで観察した。さらに、16 世紀半ばから 18 世紀にかけて規範の整備がどのように進行したのかについての説明が試みられている。特に 16 世紀半ばから 18 世紀にかけて出版された文法書で、語末子音字の発音を、またリエゾンに対してどのような説明が与えられていたのかが概観される。リエゾンがどのような場合に実現されるかを Chiflet (1659)や Hindret (1687)は「制御される語」という概念を導入して、リエゾンの実現が語と語の間にある統語的結束性に支配されることを示している。ただし、リエゾンの説明は、この時代の文法書において体系的に行われたわけではなく、断片的にいくつかの重要な点についての注意書きという形に留まる。(1)スタイルの違いに対する考慮、(2)ある特定の統語的コンテクストにおける指摘、(3)ある特定の語に関する指摘、の主に 3 つの観点からコメントされていると言ってよい。

第五章では、本研究で使用するコーパスと、その作成方法について説明されている。また、先行研究と本研究との違いや、2 つのコーパスを比較することで得られると考えられる仮説について言及し、本研究の位置付けを述べた。Milleran と Vaudelin、両人とも「良き発音」を教えることを目的としているが、それぞれの趣旨は少し異なる。まず Milleran の書は文法書であり、発音に対する説明書きが多い。これに対して Vaudelin の書では、特に祈りと教理問答が発音記号で記されていることが特徴的である。この違いから Milleran コーパスでは文語的な、そして Vaudelin コーパスではより口語的なフランス語の発音が観察されるとし、これら 2 つのコーパスにおいてスタイルの違いが観察されるという仮説を立てている。

第六章および第七章は、本研究の根幹とも言うべきもので、17 世紀末および 18 世紀初頭に 2 人の文法家 Milleran (1692)および Vaudelin (1713, 1715)によって書かれた文献をコーパス化したものに基づき、語末子音字の発音およびリエゾンの実現・非実現を詳細に観察・精査し、語や語の組み合わせのグループごとに検討、考察している。

第八章では、2 つのコーパスを比較し、類似する傾向および異なる傾向を観察することで、リエゾンの実現傾向の一般性が考察される。それを踏まえ、特に語の長さと音節構造といった言語内的要因、リエゾン子音[z]および[t]の形態的マーカーの機能の成立、そして 2 つのコーパスで用いられたスタイルの違いについて考察される。両コーパスの比較によって明らかになったことは以下の点であるという。

(1) 語の長さのリエゾン実現への影響：2 つのコーパスにおいて、リエゾンの実現における MOT1（左側の語）の音節数の影響は顕著である。単音節語のリエゾンの実現率が高い理由として、冠詞類 (*un, des, les, mon, ton, son, mes, tes, ses, vos, nos, leurs*, etc)、人称代名詞 (*il, nous, vous, ils, elles, en, les*)など、リエゾンの実現率が高い品詞がそもそも単音節であるということが考えられるとされる。

(2) 語の音節構造のリエゾン実現への影響：MOT1 の語末の音節構造がリエゾンの実現に影響することも観察された。両コーパスにおいて開音節語末の語のリエゾン実現率は、閉音節語末の語のリエゾン実現率よりも高いことが観察された。つまり、母音接続がある場合には、リエゾンの実現が優先される可能性が高く、MOT1 の語末で子音が安定的に発音されるような場合には、リエゾンの実現はそこまで優先的であるわけではないと解釈することもできるという。

(3) 複数性マーカーとしての[z]:「複数形形容詞＋複数形名詞」、「冠詞類 *quelques, plusieurs*」、「複数形名詞＋複数形形容詞」のようなコンテクストにおいて、複数性という形態的機能を持つと考えられているリエゾン子音[z]は常に安定的に発音されるわけではないことが、両コーパスの分析から明らかになっている。リエゾン子音[z]がこの時代に必ずしも複数性マーカーとして機能していたわけではないことが考えられるという。

(4) 三人称マーカーとしてのリエゾン子音[t]： 両コーパスにおいて動詞の三人称単数の屈折形のリエゾン実現率が非常に高いことが確認された。三人称単数形と比較すると、三人称複数形のリエゾン実現率は特に高いとはいえず、韻文・演説でなければリエゾンの実現は義務的ではないというような文法家の証言が目立つ。このことから、リエゾン子音[t]が形態的機能を示すマーカーとなりえるのであれば、三人称単数形マーカーという限定された機能を持ち得るとされる。

(5) スタイルの違い： Milleran と Vaudelin のコーパスにおけるリエゾンの実現を比較した場合に、様々なリエゾンコンテクストにおいて、Milleran コーパスにおけるリエゾン実現率は Vaudelin コーパスのものよりも高い。特にこの 2 つのコーパス間の顕著な違いとして、韻文の朗読において推奨されている「+ 接続詞 *et, ou*」および「名詞＋動詞」のコンテクストにおいて、Vaudelin コーパスではほとんど、もしくは全くリエゾンの実現が観察されないのに対して、Milleran コーパスではそれなりの頻度で観察されることである。以上の点から、Milleran コーパスは文語的で、Vaudelin コーパスでは口語

的なスタイルにおけるリエゾンの実現が観察できると結論付けられる。

最後の結論では、第六章から第八章までの分析や考察がまとめられ、今後の展望などが示されている。

＜審査概要および評価＞

審査委員会は、特に次の3点を高く評価した:①リエゾンという音声現象について歴史的文献を用いての調査はフランス本国でもあまり行われておらず、その点でのオリジナリティー、②複雑な要因が絡み合い、さらに豊富な先行研究がすでに存在するテーマにおいて、非母語話者である学位請求者が、最新の研究成果を援用し、通時的観点と共時的観点を巧みに総合し、発音についてのコーパスを丹念に構築し、形態音韻論的な問題をデータに基づいて分析したこと、③リエゾンの歴史を検討することを通じて、音声現象が形態機能を獲得し文法化するプロセスと、さらにそれが規範化されていく社会言語学的過程が、実証的に描かれていること。

反面、扱われている文献資料に関する書誌学的情報が不足しているとか、中世から近世にかけての文法書の検討が必ずしも網羅的体系的とは言えないのではないかという批判や、リエゾンの音声環境についてもう少し音声学的に踏み込んだ説明を行ってもよかったではないか、さらにMilleranとVaudelinという2つのコーパスのリエゾンの実現状況を比較する際の頻度ということがやや平面的に扱われているのではないかといった批判もあったが、これらについて近藤野里氏は、自身の見識に基づいて真摯かつ的確に応答し、審査員を納得させた。本論文の限界や問題点についても十分な自覚を持っており、今後さらに研究を深める中で解決されることが期待される。ただし、これらの批判のいくつかは、今後の研究展開において解決されるべき点で、研究そのものの価値と完結性に影響するものではないことは審査委員全員の共通理解である。

以上のことから、審査委員会は最終的に審議をした結果、本論文は博士(学術)の学位を与えるにふさわしい学術的成果であると判断し、近藤野里氏の今後のさらなる研鑽に期待するという認識で一致した。